

豊臣期大坂図屏風の謎と魅力

フランツィスカ・エームケ*

オーストリアのグラーツ市のエッゲンベルク城が所蔵している八曲一隻の慶長年間を描く豊臣期大坂図屏風は、1754年に八枚に解体され、壁画として壁面にはめ込まれたため失われず保存されてきた。経済発展をとげた当時の大坂を描く屏風はとて貴重な存在で、特に大画面を占める大坂城の描写は、今後の研究にとって重要な視点を与えてくれる。

五七桐紋のある赤幕を張り回し、多数の漕ぎ手で淀川を走航する秀吉の川御座船と、方形造の檜皮葺屋根に黄金の鳳凰を戴き、黒地の側壁に白鷺、白地の内壁に柳の墨画が描かれている秀吉の舟あそび用の鳳凰丸は絵画史上、唯一描かれたものである。また、本丸の北側と二の丸を結ぶ二階に勾欄付き回縁を持つ豪華な極楽橋の描写は、稀少である。

さらに京橋口門前の三つの櫓門を備えた堅固で巨大な馬出曲輪は、篠の丸といわれ、この巨大さが考古学からの見地と一致した。本丸の北堀にサギシマが存在したこともこの屏風により明らかになった。

上部に描かれた祭行列は、旧暦の六月三十日に堺の宿院への三里の道を神幸する住吉大社の荒和大祓（あらにごおおはらえ）の祭礼である。これまで描かれたものの中では古く、風俗としても貴重な価値を有する。

本屏風が大坂城と城下町を有名な寺社が取り囲む曼荼羅構図を選んだ理由は、二つあるように思

う。一つは秀吉により完結した、寺社勢力を武家支配者に初めて完全に従属させた史実を意味し、寺社に大坂城の守護神としての新しい役割を付与して天下人としての秀吉の権力を誇示している。二つ目は屏風の中央に淀殿、秀頼や秀吉と思われる人物を配置し、松や白鷺を描くことにより、住吉大社と秀吉の関係を暗示し、すでに亡くなり豊国大明神として神格化された秀吉を祀り生前の偉業を讃えるためと思われる。

なお、人物描写からは武家社会が重点的に描かれるが、商業地として開発され発展した船場の町民の繁栄も意図的に描かれている。

（今号は概要のみとし、論文は次号に掲載予定。）

*ケルン大学教授